

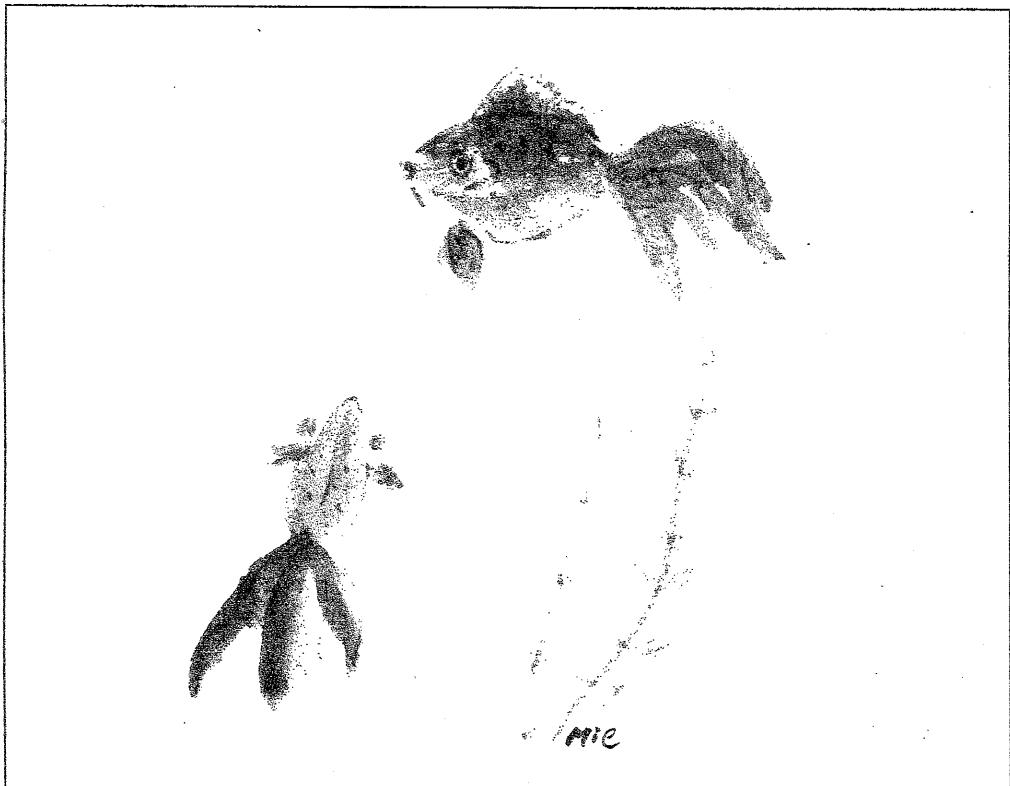
オリーブの樹

第90号

2009年6月30日

شجرة الزيتون

早期釈放！重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



目次

- P 2 六月の歌 重信房子
P 3 独居より 癌の再検査続きですが、
みんなの励ましに元気な夏を迎えていきます 重信房子
P 11 重信さんとの交流コーナー
P 12 読者からの声
P 12 アラブ物語（2）—71年日本脱出（2） 重信房子

重信房子さんを支える会

六月の歌

重信 房子

芍薬に百合にようかん差し入れの吾子の漢字の拙いまごころ
風のか誘いなか君なか振り向く先に独房の壁
だんだんに染まる球形青紫陽花華やかなに哀しみの色
独房の歳月重ねた書類から戻らぬ時代を辿る夜あり
彼岸より夢の中へと訪れる我が母若く桔梗の浴衣



Mie.

独居よい 6月1日~6月17日

癌の再検査続きですが、みんなの励ましに元気な夏を迎えています

重信 房子

6月1日 我が人生まだ余白のすみずみに

埋めたき夢の一つ二つと

リッダ闘争の5月を終えて、もう6月。5・30の集いには、昔馴染みが集まつたことです。当時を知らない高校の友人も参加してくれてありがとう。私の方は、再び挑戦と言うと大袈裟ですが、ガンの再検査体制に先週から入っています。2月から、手術後低下してきた腫瘍マーカーが、4月から上昇に転じてしまい、5月の連休明けに採血した検査結果が、さらに悪化し、手術前の数値と同じになってしまったようです。

腫瘍マーカーのCEAは手術前と同じ、CA99は手術前よりさらに上昇していて、再検査が必要と5月20日の診察で言われました。やっぱり、大阪医療刑務所の環境に居たまま、友人たちと面会しながら治療していたら、腫瘍マーカーは徐々に落ちただろうになあ……と、早すぎる移動や、夜更かし作業を考えてしまいました。でも、ドクターは、腫瘍マーカーの上昇は徹夜明けの採血とは関係ないということです。

そんな訳で、先週から潜血便反応の検査2回が終わり、今日から食事制限体制に入っています。水分と栄養ドリンク・ラコールのみです。6月2日にはCT、6月3日には再び大腸の内視鏡検査という予定です。去年の12月、大腸内視鏡検査のためにかなりの大量下剤で腸を洗浄したのに、私の腸は普通の人よりも極端に長く、まだ洗浄不十分だったと言われていました。それに、12月の時にも、大量の下剤を受け付けず、胃がひっくり返ったようになって、吐いてしまったでした。

それで、先週、再検査の話が出た時から、食パンとバターだけを食べることにしました。これなら腸に残ることはないし、また、絶食体制に入ってからも、時間的には消化するので、大丈夫だろうと、自肅体制で準備しました。また、貧血のため、鉄剤を服用しているのですが、これは便も腸も真っ黒にしてしまい、内視鏡検査に不都合に違いないと、飲むのを辞めると看護師に申し出たのですが、大丈夫だと言うので、服用

を続けています。

朝から運動房に出て、曇り空が少し晴れてきたのを見ていきました。5月30日、初夏のペイントは青い空がずっと続く秋まで乾期の時。今頃、アーモンド、ピスタチオの生が荷台の上に山と詰まれて売り歩かれている頃だな……と、曇り空を眺めていました。

房に戻ると、看護師が、CT検査は明日なので、今夜からCT検査が終わるまでは、水分も禁止です、と告げに来ました。そして、CTの胸と腹の撮影を行った後、造影剤注射の上で同じものも撮るので、といつの検査承諾書への署名を求められました。造影剤注射などで、不測の事態に対してしかるべき対処を行うことや、検査のいかなる結果に対しても諒承しているという文書です。本人が同意していたと証明する、東拘束にとって大事な書類です。

午後には、5つの薬が少し開いたピンクの芍薬が届きました。ありがとう！アレンジの行き違いで、面会で会えなかった旧友が頼まれた他の旧友の名で、差し入れてくれた芍薬です。ありがとうと伝えてください。小さな規格の花瓶には頭が重すぎるのが、何とか力を分散させて、花瓶に納めました。楽しみです。5・30にと友人たちが贈ってくれたものです。

友人から「天使と悪魔」の中・下も、「THE寂聴」も届きました。感謝。

「天使と悪魔」の上は面会の折、友人が入れてくれたものです。アラブ人を犯人として、人種・宗教差別だし荒唐無稽ながら、ストーリーの続きを読みたくて、次の面会の折にと頼んだのですが、それを聞いて、すぐ送ってくれたものです。

夕方には、友人たちより手紙。作業に手間取って、5・30の集いには行けなかったという話や、様々な励ましの便り。ありがとうございます。友だちの励ましは、どんな時にも薬です。

夜、減灯の9時前、コーヒーを飲みました。明日のCT検査の後まで、水分は取れないでの、余計に飲みたくなりました。それから、作業に集中。

パレスチナでは、先月来、5月16日に持ち越された、エジプト情報機関のオマル・スレイマンの仲介によるハマスとファタハの両代表団への提案妥協の話し合いは、またまた延期されて、6月5日まで、期限を最終的に延ばしています。

アッバス大統領は、5月28日、米国オバマ大統領会談前に、一方的に内閣を作り上げてしまい、PFLPはこうした動きは分裂を拡げるだけだと非難しています。アッバスに過渡期暫定政府を許し、ハマスやPFLPらは内閣諮詢委員会という位置で妥協させる、という提案が4月になされて、その結果を合意させるのがまた延びています。

米国の音頭で、イスラエルを認めないパレスチナ政府は認めないという枠組みの中で、パレスチナ側は妥協を求められています。この間、5月16日には、ハマスへのゼスチャーとして、エジプト側は、ガザ国境を2日間だけ開けることに合意したようです。

東エルサレムでは、ユダヤ化政策が進められている様子が5月の朝日新聞にも出ていました。イスラエルは国際社会や国連決議を無視して、東エルサレム併合以降、パレスチナ人の住宅を破壊し追放する勝手な法律を作り、東エルサレムのユダヤ化をずっと進めてきました。国連の人道問題調査事務所の5月の発表でも、エルサレムのパレスチナ人住宅の取り壊しは、60年に16件だったのに、04年には133件、その後も、年70~100件のペースで進み、東エルサレムのユダヤ化が加速しています。

ネタニヤフ首相は、首相就任後和平交渉の前提として、イスラエルを「ユダヤ人国家」として認めることを求める、東エルサレムのユダヤ化を推し進める内相とパレスチナ人の追放を政策とする「イスラエル我が家」の外相の下で、民族浄化を進めるのは目に見えています。パレスチナにイスラエル国家の生存権を求めるのではなく、逆です。イスラエルに、パレスチナ人の生存権、パレスチナ国家の生存権をこそ認めさせることが国際社会に求められているのに。

また、5月には、北朝鮮の核実験がありました。この流れはさらに危機を深めそうです。かつてPFLPのアル・ハダフでの討議の中で、米国の共和党と民主党の政策を語り合った時、チェコだったかの外交官が言ってたのを思い出します。共和党はタカ派だけど、協定を結ぶのは共和党の方が実効性がある。民主党は、かえって実践上では、反対に激化するというようなこ

とを言い、キューバ危機やベトナム北爆の話を持ち出していました。

クリントン国務長官のテロ国家再指定発言と核の外交は、さらに仲介を欠いて、エスカレートしそうなのでしょうか。でも、世界の「良識」は、ブッシュ批判の中から、各国の人々の中に強くなっています。少なくとも、核は商売にも人類にも役に立たないと悟ったキッシンジャーら、かつてのその推進者たちが中国とどんな合意のもとで、北政策を固めるかが注目です。

6月2日 面会室岡本さんへ伝言

語りつ胸つく鬪争の日々

8時過ぎ、運動の呼び出し。今日は晴天です。青空の見える方のベランダに早めに行きました。CT検査が9時からあるので、その前に運動のスケジュールを組んでくれたとのこと。すでに青い空は光り、陽が壁面に当たっています。それでも床部分には、まだ陽は射していません。明るい陽射しを浴びながら、床に座って爪きり。

ちょうど東拘の真裏にあたる位置ですが、こちらからは見えない目隠し屏の向こうでは、車やレッカーカー車やはしご車、あれこれの工事中で、騒音を重ねながら作業中です。

爪を切り、1000歩を早足で歩くと、もう汗ばんできました。運動しつつ、地面を踏んだり、草や樹が見えていたりしたら、どんなにいいでしょう。少なくともここは月2回、金網ごしの青空が見えますが。

房に戻って、すぐにCT検査、B棟5階の撮影室へ。まず、今日は胸から腹部、約30秒ほどの一貫CT撮影を行うとのこと。その上で造影剤注射後、再び同じように写真を撮ることでした。30秒呼吸を止めるのは大丈夫?と聞くので、「もちろん大丈夫です」と答えました。「もし息が続かなくなったら、少し吐くのは構いませんから」とのこと。そうか……潜水15メーターなんて泳いでいたのは、何十年も前だったと思い直して、神妙に話を聞いていました。でも、30秒はまだ大丈夫でした。次に、少し太めの血管に造影剤注射の点滴体制を取って、再び撮影、すぐ終わりました。

房に戻る時、気がついたら、出血。血管を圧迫していないかったので、そのまま流れてしまった。慌てて房に戻り、少し横になる。

血も止まないので、発信の作業。文章を校正したり、

バタバタしているうちにもう昼食。

午後には、パンタさんとその友人の面会。岡本さんに会いに行くので、伝言はないですかと。わざわざありがとうございます。ちょうどリッダ闘争の5・30を終えたこともあって、5月のさわやかで青い空や海のペイルートの日々を思い出して、ぐつと思いがこみ上げてしまいました。

今、面会者側は、インフルエンザ対策で、マスクの着用を強制されています。アクリル板越しでも面倒なのに、さらにマスク越し面会を強いられて、申し訳ないです。

房に戻ると、看護師が来て、明日は徹底して腸の洗浄をするので、検査時間が夕方までかかるかもとのこと。6月3日面会予定の人には、面会時間が遅れると伝言してもらつけれど、慌てて中止のお願いの伝言を友人に託して書きました。

公判関連の便りやブラジル人で、「反イスラエル」の政治風刺漫画家カルロス・ラトフさんがライラ・ハリッドを尋ねた時のネット記事など、届きました。ありがとうございます。

また、4月に「さわさわ」の仲間で、ウイシャルオーバーカムをアクリル板を越えて歌い合つた友人からお便り。読んでいるうちに、過分な配慮に驚きました。こんな風に書いてありました。

「3日前、生駒山の麓にある石切神社に行って来ました。お百度参りで、有名なところで、と言つても私はこれまで行ったことがなかつたのですが、母は自分の経験から信仰しているようで、『よう治してくれはる』と、親類や友人たちが病気になると、出かけていました。

10メートルほどの間隔で、岩が二つ本殿前にあつて、その周りを100周回るのです。絶えず20人位の人が入れかわり回つていて、外見様々の人々ですが、心の中は皆同じです。困った時の神だのみはだめだと言われていますが、その時だけでも人為を越えたものを織るのは悪いことじゃないと思っているんです。もしかして房子さんがあんまり好きではなかつたら、と少し気になりながら書いていますが、もしさうだったらごめんなさい。

ただ祈っている間に鳥肌が立つて、『俺たちが守るから大丈夫や。心配せんでいい』と、大勢の人が言つているのを聞きました。パレスチナの人々でした。(大阪弁というものが変ですね!) ああそうなんやな、と納

得しました。少し寂しくそして安心しました。

ハンカチを同封します。一応祈祷してもらったもので、患部に当てておくといいそうです。祈祷する時、その人の名前を書いてくださいと言われ、そのとおりに書き、神主さんは読み上げてくれ、何か嬉しかったです。

お百度を踏んで汗ばむ五月かな」

とありました。読んでいてありがたくて、涙がじわり。こちらにも祈祷のパワーが背中から熱く感じて、入ってきました。私は人間の未知のパワーや奇跡を信じる方です。ありがとうございます。何かちょうど明日が内視鏡検査、勇気付けられました。二種類の下剤をこれから飲んだり、検査よりも検査前の準備の大変さを知っているので、少しうんざりしていましたが、こんな風に支えてくれる友情があることは、私をさらに強靭にしています。感謝。

夜は急ぎの作業。夜8時過ぎ下剤を飲んだのですが、作業に熱中。

6月3日 内視鏡検査を終えて待ち受ける

夕膳モズクに麻婆豆腐にうどん

今日は大腸の内視鏡検査。検査までの道のりが大変です。まず朝採血と検尿。これは腫瘍マーカーのチェックのためです。その時大ボトル、2リットル入りの下剤を渡されます。これは去年12月の内視鏡検査の時も、大阪での手術の時も飲んだものですが、生理的に胃が拒否して吐いてしまうのを、いかに吐かずに大腸に流し込むかが大変です。これは浸透圧を利用して、体液より濃度が濃い液体で大腸を洗浄するというものです。手術の大坂では、前日に一日かけてだましまし飲んだのですが、東拘では、当日朝から星までに飲むので、前回12月も吐いてしまったものです。今回はもう四分の一ほど飲んだところで吐き、胃が受け付けないので困りました。

でも今日が内視鏡検査と先週から分かってから、大腸に食べ物が残らないように食パンとバターだけ食べていたし、昨日の強力下剤で、明け方にはもう洗浄されている感じだったので、その旨告げて、ゆっくり2時くらいまでかけて吐きつつ、半分の1リットル分飲みました。

その後腸の長い私は3回も腸洗浄して、やっと3時から検査室へ。検査中は脈を測りながら、点滴をしつつ、内視鏡検査ですが、これ自身は点滴に眠り薬も入

オリーブの樹 第90号

っているらしく、うとうと眠くなるくらいで、辛いことはありません。4時くらいに終了。

内視鏡で撮影した腸内写真を見ながら、盲腸のあたりとS状結腸から直腸の辺りにあるポリープを示し、これらは前より少し大きくなっているが、問題ない。大腸に大きな異常はなく、大腸が腫瘍マーカー上昇の原因とは考えられない、とドクターが説明してくれました。「小腸でしょうね？」と私が言うと、「抗癌剤を補助治療している原因是小腸が悪性腫瘍(粘膜酸性化癌)の2期だったためだし、小腸検査をやりましょう」と言ってくれました。

「どんな検査？ カプセル飲むのですか？」と聞くと、それは東拘ではやってなくて、鼻から管を通して食道・胃から十二指腸まで届いてから、そこからバリウムを流し込んで、検査する方法しかない、とのことでした。「やりましょう！ 早い方がいいですね」と私。ドクターもそうしようとと言ってくれて、次の検査です。早く腫瘍マーカー上昇の原因をつかまえない。

ドクターにお札を言って、戻るとちょうど夕食時間。下剤飲むときはゲーゲーという感じでしたが、検査も終わって、たちまち元気。麻婆豆腐、かけうどん、モズクの小さいパック、それに缶詰のパイナップルの夕食。モズクとかけうどんだけ食べました。

今日はちょうど下剤でしんどい時に、友人がみごとな百合とほたるぶくろに似た花を入れてくれて、その花に気持ちが和みました。

また、ちょうど「連赤の証言」の冊子が届いて、夜読みました。私は全く革左について知らなかったので、興味深く読みました。その中にMさんのことが出ていて、昔を思い出しました。横国大のML派の彼は、明治に来だして、ある日私たちがML派の立て看を破いたと言って、集団でゲバトルリンチをかけに来たのを覚えています。その指揮者がMさんでした。

ちょうど学館の4階に居た朝方、襲撃して来ました。「女にやる気か？」と、私が叫んだために、私には手を出さず、B君はぼこぼこにリンチされ、拉致されました。そして3階の私たちの二部中執に立てこもりました。私は和室に寝ているブントの仲間に知らせ、社学同委員長だったA君も駆けつけ、正面の昼間部中執に集まって、反撃に出ました。拉致された仲間B君を助けに行って、拉致された下級生のO君の二人を取り戻そうと大騒ぎでした。

当時は学生大会真近で、わたしたちがML派を追い

出すのではないかと、危機感を持っていたようでした。明治のML派やブントは、対立していたわけではなかったのですが、M指揮の「外人部隊」が襲撃団で、明治のML派は一人も居ませんでした。甲高い声で、すぐ他人を糾弾するMさんを、私たちは嫌っていました。ML派は当時全国的拠点校は明大しかなかったので、明治の二部を重視していました。私たちもそれを分かっていて、ML派を排除する気はなかったのですが、以来一時期面白くない関係になってしまいました。

こんな事件があったのは、68年だったと思います。でも、私たちは、明治のML派とはずっと仲良しだったし、解放派とも、中核派とも一緒に執行部を作っていました。いろんな党派が居た方が執行部で話し合えばよいし、学生に迷惑をかけることはないからです。

あのMさんが僧侶となり、連合赤軍の人たちに対して、魂の救済のために尽力していたのを知って、びっくりしました。

ML派から見たら、私たちもまた「生意氣で、デタラメな奴ら」だったのでしょう。お互い様だったのだと、今なら言える気がします。公判以降、今も支えてくれているのは、明治の当時のML系やブント系の旧友たちです。自分たちが歩んできた歴史的なことは、他人を批判すると、みな自分に跳ね返る気がします。

6月5日 雨の獄「手紙」の訳詞読みながら

彼岸の母らの声を聞きたたり

もう梅雨も近いのだろうか。運動房に出ると雨。屋根の上の緑の姫女苑が、天に向かって雨を吸収しています。去年はひょろっとして、花が咲かなかつたけれど、今年は咲きそうです。新庁舎になった翌年の2004年から、毎年同じところに姫女苑が育ち始めています。

戻って、資料を受け取り、発信の準備や書きものをしているうちに、もう「配湯！」の声。昼食後送られてきた資料の読み込み。ちょうど、5.30集会に配られた資料も読みました。「ムーブメント連帯」や岡本さんのリッダ闘争の挨拶を読みながら、祝祭として過ごしたペイルートや難民キャンプ、戦場の兵舎での、その年その年の5.30の祝祭を思い出して、胸が熱くなります。毎年どこに居ても駆けつけてきたPFLPのアブ・カリールが、去年亡くなったことをPFLPのネット記事で知りました。それでも昔いたず

らだった若者たちがリーダーになり、ジェラシの戦友も副議長に就き、昔の戦友たちは引きつづき厳しい中で、ハマスとファタハの対立をどう統一の力にしていくかと苦闘しています。いつも統一を呼びかけるPFLPの声は、時には力強く、時には無理だ……という条件の中でも決して諦めずに「民衆の要求は統一」と、その戦略を柱に、武装闘争も政治工作も行っています。連帯の力不足を思いつつ、新しい条件を育ててほしいと思わずにはいられません。

午後、メイの面会。メイはニコニコして、「いいことあったの！」と話。知らない親類が会いに来てくれたことやプライベートの楽しい話をしていたら、もう時間。面会時間は、6月から午前12分、午後10分に少し伸びたけど、短い。内視鏡検査の話する間もなく分かれました。

また、ちょうど友人が送ってくれた「手紙」の歌の訳詞を読みました。介護の仕事に就こうとしている定年退職後の友人がこんな歌があると、贈ってくれたものです。“年老いた私が、ある日今までの私と違っていたとしても、どうかそのままの私のことを理解してほしい”で始まるこの「手紙」という歌は、愛する子どもたちに介護なしには生きられなくなった“私”は、昔子どもだったあなたを思い出しながら、してほしいことが書かれています。

この歌はきっと多くの人に歌われているでしょう。ここに訳詞を載せるのは不要かもしれません、心のこもった親から子への想いです。

“私の姿を見て悲しんだり、自分が無力だと思わないで欲しい。あなたを抱きしめる力がないのを知るのは辛いことだけど、私を理解して支えてくれる心だけを持っていて欲しい。きっと、それだけでそれだけで、私には勇気が湧いてくるのです。あなたの人生のはじまりに～。私の子どもたちへ、愛する子どもたちへ”で終わります。

友だちにありがとうと思って、雨の日朗読しながら、元気なまま逝った母を思い出しています。独房では、話す機会が少ないので、よく朗読します。この「手紙」を朗読すると、心が穏やかになります。

また、夕方、癌の手術から退院し、元気に自宅療養に戻られたTさんから、「毎日お粥を焼き、料理（と言つても、魚の煮付け、鰯大根、肉じゃが、目玉焼き）作れるようになりました。Mさんは自分で料理したも

のは本当においしいと言ってましたが、私は料理のセンスある人が作ったものがやっぱり旨い。なんかお粥を炊いたり、温めたりしていると、一日中食べるため時間費やしている感じになります」と、お便りです。

食道と胃を摘出したので、食事も小刻みで、何度も食べるのに、大変だと思います。それでも「転移もなく、抗癌剤治療も不要で、初期段階で発見され、本当にラッキーでした」とのこと。

本当に良かったです。すでにもう、6月14日の東京での改憲阻止集会に行く人のこと、同じ日、京都でパンタさんのライブに参加する計画など、俄然元気でうらやましい回復です。

こちらから送った「柄谷行人政治を語る」を面白く読んでいるとのこと。「とくに“国家は、そもそも他の国家に対してある。ゆえに他の国と無関係に一国だけの国家提案などありえない”と述べて、同時に国家が戦争することを許さない反戦運動の方が革命的、社会主義的etc。評論という目線の高さでなく、自立した個人として、社会構造を求め、模索している姿に、昔のブント結成の話とともに感じること多かったことです。

これから総選挙に向けたTさんの構想には役に立ったかどうかは分かりませんけれど、「ひま」を大事にしてください。とにかく、元気な回復力に安心しました。

6月8日 お百度の礼に触れつつ友情の

折りにふれる芍薬満開

週末は本や資料を読み込みしたり、整理しつつ、文章作業で、2日は、あつという間に終わってしまいました。出そうとして、なかなか手紙を出せなかつた関西の友人に手紙を書いていたら、Iさんの送ってくれたお百度参りの石切神社のお札も届きました。ありがとうございます。どのように保管したらいいのか分かりませんが、手術したところにもそのお札を触れてから、写真のように、お守りの位置を定めました。

また、いつもビッグイッシュを送ってくれる友人が雑誌と一緒に、アラビア語で本または読書と書かれた、アラブの少女のポストカードを送ってくれました。感謝。

午後には、百合と芍薬を受け取りました。飾りきれないので花を工夫しているところに看護師さん登場。

「小腸検査の計画決めました。あなたも早い方がいいと言っていたので、明日はまた絶食体制で、三食とも栄養ドリンクのラコールを飲んで、三回薬（酸化マグネシウム 0.5g）を飲みます。そして、6月10日朝から検査をします」とのこと。「東拘では、小腸のこの透視バリウム検査はしたことがないので、初めてですが、がんばりましょう！」と張り切って伝えてくれました。私も腫瘍マーカーが上がる原因究明には賛成ですので、「はい。よろしくお願ひします」と、答えました。

昨日の新聞にレバノン総選挙のことが出ていました。レバノンの親米与党にヒズブラーらの野党連合がどこまで票、議席を伸ばすかと注目されるとありました。ハリリ首相の息子サード・ハリリを中心としたスンニ一派の未来運動、ジュンブラットの社会主義進歩党らに加えて、内戦時の右派キリスト教徒のレバニーズ・フォーシズ党などの連合した与党勢力を支援して、クリントン国務長官がペイントに駆けつけていました。

米国の支持と援助を、レバノンが受けられるかどうかは、親米勢力勝利にかかっていること、アメリカはシリアと対話しても、レバノンとの紛争は代償にすることはないなど、熱心にレバノン政治に介入を続けていました。ブッシュからオバマ政権になったことで、親米勢力にプラスに作用しているようです。

ジュンブラット社会主義進歩党首はブッシュの米政権には批判をはじめていたので、サード・ハリリの未来運動との同盟にもひびが入っていたのですが、反シリアではまとまっていたのは、ブッシュからオバマに交代したためでしょう。

もともと、レバノン議会の議席はキリスト教徒 64、イスラム教徒 64で、26選挙区で、18の宗教宗派が競うのですが、それ自体がすでに人口比において、公正ではありません。イスラム教徒が人口比では6～7割に増えています。仮想地支配時代のキリスト教優位の6対5の比率が内戦を経て、1989年タイフォンによって、5対5に改革されたのです。

しかし、本来この比率は、国勢調査人口比を基準として配分されたという建前なので、さらに変革される必要があります。当然そうすれば、ヒズブラーが大統領職になんでも、不思議ではないのです。今も、キリスト教徒のマロン派が大統領、スンニ一派の首相、シーア派の国会議長ですが、同じシステムを適用するなら、現在の人口比では、シーア派の大統領、スンニ一

派の首相、キリスト教徒の国会議長という具合にならなくてはならないでしょう。

結局、ヒズブラーと連合するキリスト教徒のアウン・党首の自由愛国運動が、かつての内戦時の右派のレバニーズ・フォーシズ（サード・ハリリとの連合する側）から議席を取れるかどうかが分かれ目のように見えます。ブッシュ政権からオバマ政権に代わったことで、中東での政治的立場を強めたシリアへの警戒心が、反シリア票を伸ばす可能性ありとも言われています。

6月9日 ハバナより届きし便り連帶の

兄弟のごとき豊かさ語る

今日は、朝からラコールという栄養ドリンク（1袋400カロリー）を、今回は2袋ずつ飲むようにとのこと。1袋も飲めないものなので、減らしてもらいました。絶食続きのため量を多くしたのでしょうか。

今日は、早めに面会の人が来ました。先週はちょうど内視鏡の検査の日で、面会キャンセルしたことを説明したりして、少し話し。

房に戻って、発信の準備。

午後には部屋検査。期限切れの食材があったなどと言われたけれど、特に他に注意事項なし。

夕方届いた手紙の中に、キューバからの便り。日付を見ると、約1ヶ月近くもかかっています。

「革命50周年を祝うキューバの自信に満ちた様子、決して経済的に豊かではありませんが、ゆったりとした時間の中で、豊かな人間関係を育んでいるように見受けられます。自分たちの食べるものはできるだけ自分で作り、貧しいからこそ富や財を分かち合って、競争ではなく、協同の力で互いの生活を楽しいものに保障しあっています。キューバを見ていると、幸せな人生を送る上で、必要な物質や金はそれほど多くない、大きくなることに気づかれます。豊かな人間関係を！」と伝えてくれました。

高度な福祉制度に加え、教育・医療の無料化を強い累進課税によって支えている様子が書かれています。

「残された問題としては、人々の自己決定、政治への自発的参加を含む『自由』の問題でしょう」とあります。

昔60年代、キューバの社会主義について、サークルでも語り合ったものです。労働意欲を掻き立てため、他の社会主義国の物質的刺激の採用に対して、キューバは道徳的刺激を創造的に作り上げようとしてい

ました。競争も個人的ではなく、協力し合う集団的方法など目指していました。

「サトウキビ狩りのプリガータ」がパレスチナと共に、ボランティアとして語られていたのは、60年代から70年代でした。

71年にペイントに着いた後、PFLPアル・ハダフのオフィスで、あるアフリカの友人が「60年代、ゲバラはアルジェに来て我々を励まし、また、アパルトヘイトの南アを助けるために助力した。ゲバラは工業相だったが、武器は商品ではないと連帯を約束実行してくれた」と語っていました。当時、ハバナ、アルジェ、ダルエスサラーム、そして、ペイントと革命根拠地に各国から革命家が集まって、助け合いを語りあつたものです。

社会主義の国々が崩壊した後で、キューバが生き残ってきたのは、やはり、ラテン・アメリカのコンチネンタルレベルの希望と結びついて、社会主義を作り上げてきたためだと思います。多くの革命家がキューバで学び、また病気や傷を癒し、母国に戻って、また闘いました。そして闘いの中で、キューバをいつも祖国のように支え守る役割をも果たしながら、人民の希望の根拠地であり続けました。もちろん欠陥は多々あるでしょうけれども、キューバは国境を越えた革命だとしみじみ思います。キューバ人もそうだし、ハバナもそうです。国境を越えないとい、やっぱり闘いの妥当性が描ききれないものです。

キューバ革命50周年の友人の便りに励まされます。

今日の新聞では、レバノンは親米与党の勝利の記事を読みました。でも、多分、投票総数からしたら、野党の方が多数を占めているはずです。制度の欠陥のために与党の勝利となっているのでしょうか。そのために、これからも力の拮抗は続くと考えられます。

これまでそうですが、米国や親米勢力は、再びヒズブラーの武装解除を求め続けるでしょう。しかし、イスラエルとの包括的中東和平協定に、武装解除はできないでしょう。

イランの総選挙で、現大統領が再選されるのは確実なので、これまでの構図の中で、シリアが鍵を握りそうです。

6月10日 モニターに映るわが身のびやかな蠕動運動じっと見つめる

今日は小腸検査。朝まだ8時半前から検査室へ。結果8時20分から昼食の11時40分まで、検査にかかりました。

鼻から管を通して、食道、胃、十二指腸へと管が届いたところで、バリウムを流して透視写真を撮る検査です。十二指腸まで管がなかなか入らず、それに1時間以上かかってしまい、悪戦苦闘でしたが、何とか終了しました。

東拘では初の検査でも、ドクターは他の病院での経験もあり、また、検査によって、新しいことが分かるという思いで、私も、スタッフも、張り切っていました。内視鏡と違って、癌だと見つけるのは、写真で精査する必要があるそうです。モニターで小腸の手術跡を見ました。5～6メートルあるという、こんがらがったような体内を初に見ました。私の小腸は、私やドクターの悪戦苦闘も知らずという感じで、伸びやかに蠕動運動を繰り返していました。やっと終了。

昼食時に戻っても、まだ食欲は湧きません。抗癌剤服用の関係で、飲食時間の制約があり、午後に昼食。のどから胃まで、管でいた時間が長かったので、少し今日は体力を使った気分。休憩して、早く寝ることにしました。

今日は梅雨入り。紫陽花の季節です。

6月11日 梅雨便り紫陽花の花様々に

描きし友の季節の便り

今日は壮快。雨ですが、昨日でCTやこれまでの検査は終わって、一段落です。後は来週くらいに検査の総合的結果を知らせてくれることになります。原因は分からぬけど、とりあえず検査が終わったので、食事も通常に戻りました。

午後には姉が面会ですが、心配そうにしています。心配すると思ったので、ちょうど月曜から始まった小腸検査については言つてなかったので、それも終わつたことを告げました。姉も大腸の検査をして、潜血反応に異常はなかったとのことで、ほっとしました。お互いに検査のことを話していたら、もうすぐ10分。時間切れです。

レバノンの選挙の結果、議会多数派は、与党ハリリの未来運動を中心とした親米3月14日連合（反シリ

ア決起を記念した名前)が71議席、ヒズブッラーを中心とした野党連合は57議席という結果でした。

しかし、議会多数派は、国民多数派ではありません。選挙制度の欠陥のためです。もちろん、親米勢力もアメリカも選挙制度を変えることを恐れています。今のところ、ヒズブッラーもあえて選挙制度の改革について主張していません。しかし、野党側に投票したのは、839・371人(54・7%)でした。3月14日連合に投票したのは693・931人(45・3%)でした。神の党的ナスラッラー師は、選挙結果を認めています。

議会多数派と国民多数派が違う情況がレバノンの現実を表しています。今後組閣がどうなるでしょう。勝利した議会多数派は、去年の「カタール合意」によって、「内閣の3分の1の議席を野党に与える」ことで、均衡を保ってきました。

この3分の1によって、閣議決定に野党側が拒否権を持つことができたのですが、今回も野党側は、統一内閣なら拒否権をもてる3分の1の内閣を要求するでしょう。野党が野に下ると、与党は政策を実現できません。これからハリリの息子が首相に就くでしょうが、どんな組閣ができるかが見ものです。アメリカとサウジが彼を万全に支えています。

選挙期間中には、ドイツの週刊誌シュピーゲル中心に、2005年のハリリ暗殺をやったのはヒズブッラーだというキャンペーンを張っていました。イスラエルの外相リーベルマンは、「ナスラッラーを国際手配・逮捕すべきだ」と一方的に声高に騒いでいました。ハーグ国際法廷でもこの手のキャンペーンがこれから続くのでしょうか。このハリリ暗殺事件は、政治の道具にずっと使われています。

パレスチナでは、統一政府の問題が、また、継続審議中です。

シリア訪問中のカーター元大統領は、ハマスと直接交渉せずに、イスラエルとパレスチナの和平を実現することはできないと述べています。カーターは、ちょうどシリアのアサド大統領に会い、ハマスのリーダー、ミシャールにも3度目のダマスカスでの会見を控えています。カーターは、現イスラエル政権の入植地拡大を批判し、ハマスとファタハによるイスラエルとの交渉を主張しています。

パレスチナの統一に向けた討議の一方で、ファタハによる西岸地区でのハマスへの弾圧が妨害要因になっ

ていると、PFLPもハマスも述べています。ミシャールは、オバマ大統領によるイスラエルの入植地拡大批判を歓迎すると述べた上で、言葉ではなく、行動が必要だと訴えています。

ネタニヤフ政権によって、パレスチナ和平は遠くなっているのがよく見えます。米国を中心とする国際社会のダブルスタンダードを、今こそ直視し、転換すべきです。

6月17日 追記

今日診察がありました。これまでの検査の総合的な結果、さらにまた、腫瘍マーカー上昇と潜血反応は続いていることです。また、小腸透視バリウム検査結果で、気になるところがあったので、小腸に問題ありそうと診断。

その結果、小腸の内視鏡検査をやるかどうかと聞かれました。もちろんやりますと答えました。器材も人材も搬入してやるために、少し準備に時間がかかるようです。でも原因究明に医療スタッフが誠実に対処してくれてありがとうございます。

「小腸内視鏡検査はちょっと辛いですよ」と、検査のやり方を説明してくれました。今では大腸のみならず、5メーター以上もある小腸を手繩り寄せて、小腸もカメラで一定の距離まで内視検査できるということです。そんな訳で、引き続き原因究明中で、検査続行となりました。

でも本人は自覚症状もなく、今のところ元気です。紫陽花の季節を味わうことなく、夏へ向かっています。もうすぐ夏至。そうしたら、からりとした夏はすぐです。共に健康でありたいですね。

また、前に「オリーブの樹」に連載していた「日本赤軍の歩み一闇いの路線的な捉え返しとして」をもとにし、大幅に書き変えた本「日本赤軍私史—パレスチナと共に」が7月には出版されます。

去年の出版準備校正中に癌と分かり、その後手術と統いて、出版が6ヶ月以上大幅に遅れました。そんな中、大学時代の先輩の努力で、やっと本になりました。作成に加わって頂いた方々に感謝します。

ぜひ読んで下さい。私たちの歴史的一面を知つていただけたら嬉しいです。

では、また。

重信さんとの交流コーナー

イスラムの怒り(2)

辻 邦

いわく「複数の妻との結婚が一般的に行われるなら、当然、結婚できない男が増えてしまう」つまり、イスラムが男性優位の宗教ならば、そのような男性に不利な規定を設けるはずがないというわけだ。さらに、コーランの規定では、男性は全ての妻を平等に扱わなければならない。これは、男性にとり、精神的にも肉体的にも経済的にも、かなりキツイことであり、この規定の背後にあるのは、戦災未亡人・孤児救済という思想だという。あるいはそこに、富者が社会的弱者を救済しなければならないという、イスラム教の根本教理を見出すことも可能かも知れない。

■パレスチナへの視点

『イスラムの怒り』の中で内藤氏は、パレスチナ問題についても的確な指摘を行っている。

彼は、欧米がハマスを交渉相手にしないという態度を取り続けることを非難する。そして、パレスチナ人が選挙でハマスを勝たせたという、欧米にとっては困惑すべき事態の背景にあるものを解説する。

内藤氏はハマスについて、「宗教色のない民族解放運動がいつこうに成果をあげなかった結果、パレスチナのムスリムが、最後に望みを託した解放運動組織」と規定する。確かにこの規定には、頷けるものがあると思う。実際、過去の解放闘争の中で、世俗組織PLOはイスラエルに一方的にやられ続け、パレスチナ人の期待を裏切ってきたと言つても過言ではないからだ。

PLOの誤謬は、枚挙にいとまがない。湾岸戦争でサダメ・フセインを支持したこと、全パレスチナ解放を放棄するオスロ合意を締結してしまったこと、オスロ合意よりさらに後退する「ロード・マップ」の土俵に乗ってしまったこと……。おまけに彼らは自治政府の主要ポストを牛耳り、不正や汚職の風聞には事欠かないあります。

エルドアンは「子殺し」という言葉を繰り返しているが、そこには、ムスリムとイスラム文化が、子どもたちをとりわけ慈しみ、子どもたちを殺す者や子殺しという行為に対して、激しい怒りを示すということが強く示唆されている。またそこに、ジダン「事件」で示された女性への侮辱に対する怒りと同様に、社会的弱者へのムスリムの保護意識が介在しているとの指摘も可能だろう。

その他にも内藤氏は、イスラム特有な考え方や思想について、いろいろと取り上げ、わかりやすく解説している。例えば、欧米や日本でよく言われる「一夫多妻制=女性差別ではないのか」という意見について、それが誤解に基づく偏見であることを指摘している。

人々を苛む慘状には目を覆いたくなるものがある。

他方、ハマス台頭の背景には、欧米の認識の誤りと偏見があるとの指摘もなされている。つまり、欧米は、途中でパレスチナ側の主役がPLOからハマスに交替したことの意味を理解していなかったというのだ。

確かに、なぜパレスチナ人がハマスに「最後の望み」を託したのか、つまりハマスが民主的選挙で勝利したのは何故なのかという点に関する欧米の権力者や識者、メディアの視点は、完全に抜け落ちている。だからこそ、「テロ組織とは一切交渉しない」などという傲慢な意思表示がなされるのだろう。

「イスラエルによるパレスチナ攻撃は、多くのムスリムの命を奪った。それを一貫して支えてきたのがアメリカであることは、世界の誰もが知っている。パレスチナ問題にとって、アメリカは過去半世紀以上を通じて、ずっとイスラエルの強力な支援者であり、その意味で間接的な加害者でありつづけた」という内藤氏の指摘は正しい。問題は、過去半世紀以上の間に、欧米諸国の指導者の誰一人として、この指摘を理解する能力を欠いていたという恐るべき事実だ。

※ ※

対峙する相手——それがたとえ敵対する相手であろうと、いやむしろそうである場合にこそ——の意思や、その行動の背景となる思想を理解しようと努力しなければ、相手への偏見を消すことはできないし、正しい政策を進めることはできない。

欧米の指導者や識者、一般国民は、なぜいまイスラムの民衆が欧米に対して、激しく怒り憤っているのかについて、真摯に考え、捉え直すべき時に直面しているのだ。

読者からの声

無事手術が成功し、喜んだのも束の間、また腫瘍マーカーが上がったとのこと。心配ですが、病との闘いも、革命家としての人生でしょう。推定●罪の未決暮らしの人権無視は、許しがたいものです。

私も若い時二度の拘置所生活で、非人間的扱いと闘った経験がありますが、重信さんのご健勝を。

6月25日 宇治市 T. Y.

アラブ物語（2）

71年日本脱出（2）

重信 房子

尾行や実務で多忙な私に代わってアラブ通へのコンタクトを取り、学習し、すぐ語学その他準備体制に入った。

どこからだったか、Cさんか森さんか、国際部からか、パレスチナ派遣の部隊に党员でない人材である奥平さんを派遣するのはいいのか？ という話があった。当時、米国派遣部隊も、みな赤軍派メンバーだったからだと思う。その結果、奥平さんも赤軍派として行くことになった。行く以上、けじめとしても革命党の一員でありたいと、奥平さんも当然と考えていた。京都で加盟確認し、革命戦線責任者の「政治学習」を終えると、奥平さんは3ヵ月上京して、新兵訓練に加わることになった。当時、秘密維持が困難な条件で、東京に行くのは気になっていたが、それは当時の軍の決まりであったのだと思う。パレスチナ派遣自身が当時秘密裏に進められていた。そのため、軍のリーダーのみ把握している条件で、Sさん指揮の部隊で、70年11月頃からか3ヵ月共同生活をしながら、訓練期間を過ご

すことになった。新兵訓練について、後に奥平さんに聞いた話では、「土方」労働や尾行訓練、政治学習討議などだったらしい。

71年正月過ぎごろ、奥平さんたちの住んでいた軍のアパートで、一度、国際部の会議をすることになった。部屋がなかったためだったと思う。当時の国際部のキャップは、茨城大のSさんであった。会議を終えて、私はブーツをはくために小さな靴ぬぎが狭く、ドアを細めに開けると、ちょうど赤軍派特捜班の高橋正一刑事が横顔を見せながら、何か遠くへ合図を送っているのが突然目に飛び込んできた。「包囲されている！ この軍のアパートって、ばれてるんじゃないか！ 安全と思って会議してたけど……。」

慌てて対策を練った。とにかくばれていない奥平さんを防衛しよう。他の者は表から一斉に散り、彼だけ別個に扉を乗り越えて移動し、下北沢で落ち合うことに決めた。彼が、山茶花か椿の咲いているコンクリートの高い扉の向こう側に身軽に飛び降りたのを確認して、私たちはドアを開けて、一斉に四方に散った。

結局、東京に居ては身分すらばれてしまう。何か事件があつてからでは、出発もおぼつかなくなると、まだ半月くらいの訓練期間が残っていたと思うが、国際部からSさんに話し、終了にした。とにかく京都に戻って出発準備してもらうことにした。これは1月中旬くらいだったと思う。

こうした弾圧・尾行の中で、秘密に出発準備することは、外国行きの経験もない私たちには難しいことだった。

奥平さんが関西に引き上げてから、私も本格的に出発の財政的身分的条件を検討した。公安に覺られないよう、どう出発するかがテーマだった。東京では、当時赤軍派を7・6事件以来離脱してキューバ研に居た藤本敏夫さんや、関西の国際部や組織部の限られた友人たちと出発のための準備を検討した。

奥平さんはマークされていないので正規に問題なく出国できるが、私の方は発覚すれば出れないだろうということになった。そしていくつかの案が出されて、その一つが結婚による名義変更によって、時間稼ぎをするという出発の方法だった。そのために何人かの協力を得た。しかし、結局、マークされていない人に、事情説明して秘密を広げたくないということもあって、奥平さんら共同していた人たちと話し合い、奥平さんの籍に入つて出発するということにした。

当時、森指導部の指示で、私の後に組織部的な活動を引き継ぐことになったと、大阪市大のKさんが関西では共同していた。同志社大の友人たちには、Kならもう俺もやめると言う人が居たほど、仲間内の評判は良くなかったが、「やり手」の人らしい。森さんと一緒に同じ頃戻ってきた人だ。大学時代からの仲間で、仲がよく、よく森さんを支えていた。このKさんのが、当時まわりに居る正規の既婚者だった。婚姻届の書き方を教えてくれ、その書類に保証人として署名してくれた。

そして、2月2日に奥平さんが婚姻届を出したのだった。その後パスポートを取って、あわただしく出発することになるのだが、権力は密かに何かを嗅ぎ取ろうとしていた。アラブへの出発は徹底して秘密だったので、パレスチナへの出発時には分からなかつたようだ。出発数日後に公安は実家に来て、「とんでもないことをした……」と、愚痴っていたらしい。ただおかしな動きはあった。奥平さんが婚姻届を出し、出発準備に実家に帰った時に、ハグニングがあった。ちょうど2階で、出発に向けて荷物を整理していると、訪問者があった。高校の友人の名を名乗り、「奥平君結婚したんですってね？！」と、母親にたずねている声を聞いた。公安の誰かだ。奥平さんが階下に降りていくと、訪問者は慌てて逃げ出し、止めてあった車で逃走したという。この話を聞いて急がねば……と、思った。

ある日の夜、京都で奥平さんが暗闇に待ち伏せされて、リンチを受けた。当時の公安は暴力的だった。勝手に忍び込んで書類を盗んだり、神奈川ではアパートの天井に盗聴器を仕掛けているところを見つけたこともあった。夜は数人で暗闇に連れ込んで、リンチしたり、公安は赤軍派より過激で暴力的だった。

また、私も、友人の京大のNさんから「結婚したって本当ですか？」と聞かれた。誰にそんなことを聞いたのか？ と聞くと、ある友人の名を上げた。公安の側から情報を確認しているのが、逆にこちらに届いたような動きだった。急がねばならない。準備を急いだ。

＜森さんと最後の会議＞

70年1月中旬か下旬の寒い日、当時の赤軍派のカーボルたちの会議があった。私が森さんに会ったのは、この会議が最後となった。森さんはこの会議で初めて

12月末に革左と組織的に会議を持った事実を少し誇らしげに報告した。当時、他党派は競合の対象であったので、共に闘うために話し合うことは、画期的なことだった。そして、森さんは武装闘争を言う口先ばかりのブント諸派よりも「革左」がはじめて、真剣であつたことを告げた。

ことに直前の12月に、「革左」は銃奪取闘争で板橋の交番を襲って、銃撃され、仲間が一人殺されていた。のことと合わせて、彼らとの共同を今後の大切なテーマと考えていたようだった。「革左から赤軍派に銃を提供してほしいと言われた。」少し言いにくそうに森さんは続けた。「本来貸すべきではないが、今回は特別貸したいと思う」と、他の人々の同意を求めた。

私は反対した。「銃は本来貸すべきだろうが、今回は貸さないとするべきだと思う。私たちには貸せる銃があるのか?」名義のばれたら困る獵銃と改造銃があるとは聞いたことがあったが、まともなものはない。獵銃は家から黙って持ち出したというし、何かあれば軍事共闘もばれてしまう。私が反対意見を述べると、森さんはすぐにその議題を引っ込めてしまった。そういうだらうなあという感じで、あまり議論もなく、銃は貸さないことになった。きっと森さんも本当は貸せないと思っていたせいだとその時は思った。

その議題の後、Uさんが発言した。ゲリラ部隊として、軍の独自的活動を主張していたUさんは、森さんが自分のアジトに尾行を付けたまま訪問したので、自分がいかに危ない目にあったかと、森さんを批判し始めた。すると、俯いていた森さんが突然立ち上がって、激高し、「俺が辞めるか、お前が辞めるかどっちか

だ!」と、怒鳴り返した。Uさんも身構えたが、Tさん、Bさん、Aさんらが間にあって、まあまと納めた。温厚な森さんのそんな姿を初めて見た私はびっくりした。あの光景は忘れられない。私は森さんがそんな無頼漢のように振舞うのを初めて見た。

森さんは、Uさんの話の前の「革左」に銃を貸す問題のわだかまりが激高の原因かもしれない、私は感じながらその場に居た。けれども、私は森さんに期待していなかつたし、また、私には手に負えない現実に積極的に関わろうとは考えなかつた。当時は武装闘争路線を主張しつつ、行き詰まっていた分、政治的繋がりよりも、気の合う者同士が繋がっていたように思う。

森さんは、私のように旧いメンバーが信頼を寄せたり、もり立てたりせずにいた分、孤立した中で、信頼を寄せてくれる少ない軍の仲間と共に難局を乗り切ろうとしていた。今になると、それがどんなに大変なことだったかと分かり、胸が痛い。若さは決然としていて、その断定は、時にはプラスに、時にはマイナスに作用した。獄中からのかつてのリーダーたちの各々の理論や注文や批判の数々、獄外のリーダーのCは去り、Cを尊敬していた何人かも去った。また、残っている者も批判的なことを言う。この厳しい中を、森さんは何としても武装闘争を引き受けねばという思いに駆られて突き進んだと思う。彼の使命感が今は良く分かる。リーダーは、特にどんなに自信満々に見えている時でさえも、確信の中に見栄もある。同志たちを結束させるために、無理したのだと思う。

私は、当時、まったく森さんの立場に立って彼を慮って考えることができなかつた。森さんは困難の中、退くことができずにいただろう。M作戦と「革左」との共同で突破口を作ろう、それが多分彼の考えていたイメージだったのかも知れない。

この会議を経て、赤軍派は連赤の道を歩むことになったのだろう。

<出発中止命令>

私は関西で日本脱出の方法を確認し、その手続きを終えて、東京に戻った。さて、どうするか、まず、パスポートを取得しなければ……というところで、幸運にも日本交通公社に勤める下級生とばったり会って、出発準備を急いでいた。

ところがこの頃、出発間近になって、「軍の指示」

ということで、私のアラブへの出発の中止を伝えてきた。伝えてきたのは、当時のサブリーダーのTさんであった。これまでも、森さんは私に面と向かって批判したことではない。今回も自分で伝えるのを避けて、Tさんをよこしてきた。私は、「派遣は中央委員会決定であり、変更するなら中央委員会で決めるべきだ。会議が開けないなら、森さん自身が会議に来るべきだ」と反論し、応じなかつた。

対立が続いた。森さんは私が決定に応じないのは組織日和見主義だと私を批判していると、Tさんから聞いた。Tさんは私と森さんの間を行ったり来たりして困っていた。

私は森さんの自分で来ようとしない、こうしたやり方にさらに不信を持った。「分かった。私は赤軍派をやめて行きます」と、決断した。そして、それまでに旅行用に集めた金を、森さんに返してくれとTさんに返却した。私が日本に居て金集めをせよという意向も分かっていた。もう、それらは遠山さんやKさんに引き継いでいたことだった。しかし、金は必要だろうし、また、私は辞める以上、赤軍派として行くために集めた金は返さないだけじめがつかないと思った。

そして個人として、行くことに決めた。私には、その時の赤軍派は希望も展望も終わったように小さく思えた。森さんのもとで、M作戦などやり出しているし、おかしな度胸試しに引ったくりもやれという人が居ると、軍から相談に来た人も居た。この先赤軍派は失敗するだろう、私には手に負えないと思っていた。

そんな風に森さんのリーダーシップになってから、愛着一杯の赤軍派への思いは急速にしぶんできてしまっていた。赤軍派を辞めよう。辞めたっていい。旧い赤軍派の仲間が居る。獄中の仲間たちのためにも、日本の階級闘争にとって、海外に行くことが次のステップにとって、何より重要だと思っていた。当時のこうした「使命感」は、自己肯定と表裏の関係にあった。

こうして、赤軍派を一方的にやめてしまった。遠山さんは起こっている現実や想いを打ち明けた。彼女も同じ意見だと、「個人でも行く」という私の出発を応援してくれた。遠山さんは結婚し、夫が獄中にあつた時で、救援や組織化でなくてはならない人として活動していた。私は遠山さんに私の個人的な友人たちの人脈も引継ぎ、アラブ・パレスチナで闘うことで赤軍派をまた再建したいと語り合つた。

すでに、奥平さんも出発条件を整えているはずだつ

た。私には、森さんの指揮下の赤軍派という組織的条件は失われても、支えてくれる仲間や友人が居た。その人々がもっと大きな革命の目的のために協力してくれるはずだ。私は出発間際に個人的友人たちから個人的出発のためのカンパを募った。そして、引き続いて準備した。関西に行って、そのことを限られた友人に告げた。奥平さんは、自分が赤軍派になつたけど、あなたの方が赤軍派をやめたのか……と、笑いながら言った。奥平さんには計画通り進めてほしいと伝えた。赤軍派は奥平さんの後に続いて、人材を派遣するはずだ。こうしてすべての準備を整えた。

出発前日、森さんの伝言を持ってTさんが会いに来た。「そこまで言うなら、赤軍派として行ってほしいと森さんが言っている」と。私は東急ホテルで、森さんへの走り書きの手紙をTさんに託した。これまで森さんに対して個人的対立としてしまい問題を解決し得なかつたことを詫び、赤軍派の一員として国際根拠地を目指すと手紙に記した。こうしてベイルートへと旅立つた。

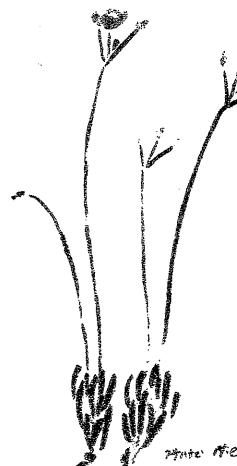
あの71年、組織内の事情もあつたし、私のパレスチナ・アラブへの思いも熱かった。この後、森さんが歩を進めた連合赤軍への道が、あのような結末を迎えるなどと、誰が考えただろうか。

1971年2月26日、すでに奥平さんは一足先に出国していた。1971年2月28日、私は羽田国際空港からスイスエアーで、ベイルートへと向かつた。出発時には、「連合赤軍事件」もリッダ闘争も、もちろん想定外のことであった。しかし、国内に残る仲間も、赤軍派として出発する仲間も、共通した歴史の岐路に立っていたようだ。私たちの当時立っていた考え方は、武装闘争を最高の形態として闘い、武装闘争による革命を前提として考えていて、退く考えを持たなかつた。チェ・ゲバラを胸に、武装闘争の実現こそ、世界を切り開くという思いを持って国際根拠地建設をめざした。

まだ、早春といつても寒い冬の海面を斜めにして、羽田から飛行機が飛び立つた。アラブへ。

飛行機の窓から小さくなる街と光る斜めの海を見つめながら、ふと浮かんだ一首は、寺山修司の歌だった。

マッチ擦るつかのま海に霧ふかし
身捨つるほどの祖国はありや
(2008年8月記)



面会について

- 調整なしに面会に行っても、予定している面会者とぶつかれば会えないことになります。
- 以下の要領にしたがって、より多くの方が無駄なく面会できますよう、ご協力ください。
- ・面会は1日につき1組（3人まで）しか許可されていません。
 - ・面会時間は、不当にも、午前中は10分、午後は8分のみです。時間を有効に使う工夫が必要です。
 - ・面会者自身を証明するもの、運転免許証・健康保険証などを持参してください。
 - ・なお、現在インフルエンザ対策で、面会者にマスクの使用が義務付けられています。ただし、入り口に準備されていますので、持参の必要はありません。

曜日——重信さんとの関係（調整担当者）
★月曜日——明治大学の友人・知人（小川健）
★火・水曜日——一般（山本万里子）
★木・金曜日——親族と一般（大谷みどり）
*山本万里子 TEL: 090-4367-5389 E-mail: mariko481@hotmail.com
*大谷みどり 携帯メール: midorinokeitai@docomo.ne.jp E-mail: the-5th-element@hotmail.co.jp
*トラブルを避けるため、重信さんには事前に日時と面会者名をお知らせします。1週間前には上記担当者と調整してください。無調整で直接行っても、重信さんはその人に会うと、予定者と会えなくなるので拒否せざるを得ません。また面会予定が不都合になった時はできるだけ早く調整者にご連絡ください。

★重信房子さんの本が近く発売になります

日本赤軍私史——パレスチナと共に

河出書房新社 3200円 7月24日発売

60年代、日本の中で革命に目覚め、アラブの中でも闘いつつ、また日本の変革を求めてつなげてきた私には、限界もあやまちもありました。成功例でなくとも、それは記しておく価値があると励まされて書いてきたものです。これらの私たちの歴史的・政治的一面を読み取ってくださったなら幸いです。（本書「はじめに」より）

本書は、06年1月から08年6月まで本誌に掲載した「日本赤軍の歩み——闘いの路線的なとらえ返しとして」を、大幅に書き改め、加筆したものです。

400字原稿用紙に換算すると800枚だった「日本赤軍の歩み」に、自分史、日本赤軍の前史、「歩み」ではふれられなかつた闘争や日々の出来事やエピソードから解散までの350枚加え、裁判関連の資料を付し、総ページ500をこえる渾身の大著です。

後記

重信さんの小腸の内視鏡検査がどうなるのか心配です。いずれにせよ、おそらく再手術になるでしょう。検査も手術も大変そうですが、どうぞ、こんなことでは死なないぞという意気込みでがんばってください。多くの友人が支えています。2月の手術後、重信さんは執筆活動や校正作業で、大変忙しい日々でした。7月号はお休みにして、次号は8月下旬に発行する予定にします。皆様、良い夏休みを！（Y）

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル4階

救援連絡センター一氣付 「重信房子さんを支える会」

郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

銀行口座 三井住友銀行 赤羽支店 226-3687269 オリーブの樹

www.geocities.jp/setfremarian/index.html

領布価格 500円

「正誤」表

第90号

①3P(6/1)左上から12行目

CA99→CA19-9